

## 木村定三コレクション

### 大阪府枚方市万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡

岩本 崇(島根大学)

#### はじめに

木村定三コレクションのなかに1面の三角縁神獸鏡がある。箱書に「大阪府北河内郡牧野村字三矢出土」とあり、1904（明治37）年に現在の大阪府枚方市上之町所在の万年寺山古墳から出土した鏡のうちの1面と考えられる。

万年寺山古墳出土品は、枚方小学校運動場拡張工事中に偶然出土したものであり、回収された大半の遺物はその後、東京帝国大学理科大学人類学教室の所蔵となった。梅原末治による報告では、現存する遺物として木棺のほかに7面の銅鏡が紹介され(梅原1916)、後藤守一の『漢式鏡』においてはさらに破片で1面分のあることが指摘されており(後藤1926)、本来は8面以上が副葬されていたと考えられる。なお、『枚方市史』によれば(枚方市史編纂委員会1967)、1966（昭和41）年の時点では収蔵されているのは7面ということになっている。したがって、ある時期以降に1面の鏡が所在不明となったわけであるが、『枚方市史』所収の写真と『漢式鏡』に掲載された拓影との照合から、その資料が三角縁・日月日日・唐草文帯四神四獸鏡であることははっきりしており、所在不明となっていた資料と木村定三コレクションの三角縁神獸鏡とが鏡式の一一致をみることがこのたび再確認されることになる。

小稿では、木村定三コレクションの三角縁神獸鏡を万年寺山古墳出土品と再確認したことを出発点としてあらためて本鏡を紹介し、その資料的な位置づけを整理することとしたい。あわせて、万年寺山古墳からともに出土したそのほかの銅鏡についても概略を述べ、副葬鏡群としての位置づけを試みたい。

#### 1. 木村定三コレクション 大阪府万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡

三角縁神獸鏡のなかでも、いわゆる舶載鏡として分離しうる鏡群に属する。鏡式名は、三角縁・日月日日・唐草文帯四神四獸鏡である(口絵、図1・2)。「同范鏡」が1面、静岡県磐田市経塚古墳から出土している(図3)。三角縁神獸鏡目録の76番(京都大学考古学研究室2000)、同范鏡番号41番(小林1971)に該当する鏡である。

現 状 完形品であり、顕著な欠損はみられない。全体として遺存状況は良好である。白銅色や黒色となった地金をとどめるいっぽう、全体の半分程度

が鋸に覆われている。鋸は緑色を呈するが、一部には淡緑色の鋸の発生した部分も存在する。鏡背面には凹部を中心に赤色顔料がみとめられ、鉢の上部には布が付着する。

法 量 直径21.9cm、厚さは内区で1.5mm程度、外区で4mm程度である。

構 成 中心には半球形の鉢があり、界圈によって内区を主文部と副文部に分ける。内区の外側には内区より一段高い外区がめぐる。

鉢 直径3.2cmにたいして、鏡背面からの高さが1.0cmほどと低い鉢である。上面がやや平坦であり、断面形態が台形状をなす、鉢c式(岩本2008)に属する。鉢座には有節重弧文座が用いられる。鉢孔はいわゆる長方形鉢孔(福永1991)であり、幅約6mm、高さが約2mmである(図4)。鉢孔下辺が内区の鏡背ベース面より2~3mm程度高い位置にある。鉢孔は両方の孔がおおむね水平に開いており、著しくは傾かない。

内 区 界圈近くの4つの乳と、鉢座近くの4つの乳によって、内区主文部を区画する。界圈近くの乳と鉢座近くの乳は千鳥状に配されており、4区画に大別されながらも全体は8つの小区画から構成される。乳は界圈近くのものが鉢座近くのものより大ぶりであり、前者の直径が7~8mm、鏡背面からの高さが5~6mm程度、後者が直径6mm程度、鏡背面からの高さ4mm弱である。いずれも総じて三角縁神獸鏡の乳のなかでは小型のものである。頂部は先端のある、断面三角形状を呈する尖乳であり、乳i式に属する(岩本2008)。乳座はみられない。

乳による大別の4区画のそれぞれには、神像と獸像を1体ずつ並置する複像式の配列をなす。乳の存在を除いて神獸像の配列をみると、獸像が神像をはさんで向かい合うのを基調とし、鉢をはさんで同じ構成が反復される、いわゆる対置式の構図をとる。小林行雄の配置分類ではF2(小林1971)にあたる。神像ならびに獸像はともに合計4体ずつ存在する。細部には個々で差異がわずかにあるものの、基本的にいずれもほぼ同様の表現をとる。神獸像表現は岸本直文の分類による表現①である。

神像は正面を向く坐像であり、神座がともなう。両肩から雲気が伸びる。頭部には、三山冠と中央に突起をもつ渦状冠という異なる表現が併存する。前者が東王父、後者が西王母をあらわしたものであろう。体部は全体を膨らみで表現し、衿や衣服の襞は突線であらわす。袂は全体を輪郭線で囲む。

獸像は頭部を正面に向け、体部を側面観で表すものを基本とする。1体のみ頭部を振り返った状態で顔面を側面観で表現する。頭部に角が明瞭に付属するものがみられる。目は瞳を突起で表わし、全体を突線で囲む。鼻などの顔面の各部については膨らみで表現し、口は大きく開いて鉢(維綱)を衔える。口のなかには牙と舌がみえる。頸は頭部のやや後ろ側にとりつき、体部と連続する。体部は胸、肩から腹、尻にそれぞれ数条の突線によって羽毛を表し、前脚と後



図1 木村定三コレクション 大阪府万年寺山古墳出土三角縁・日月日日・唐草文帶四神四獸鏡

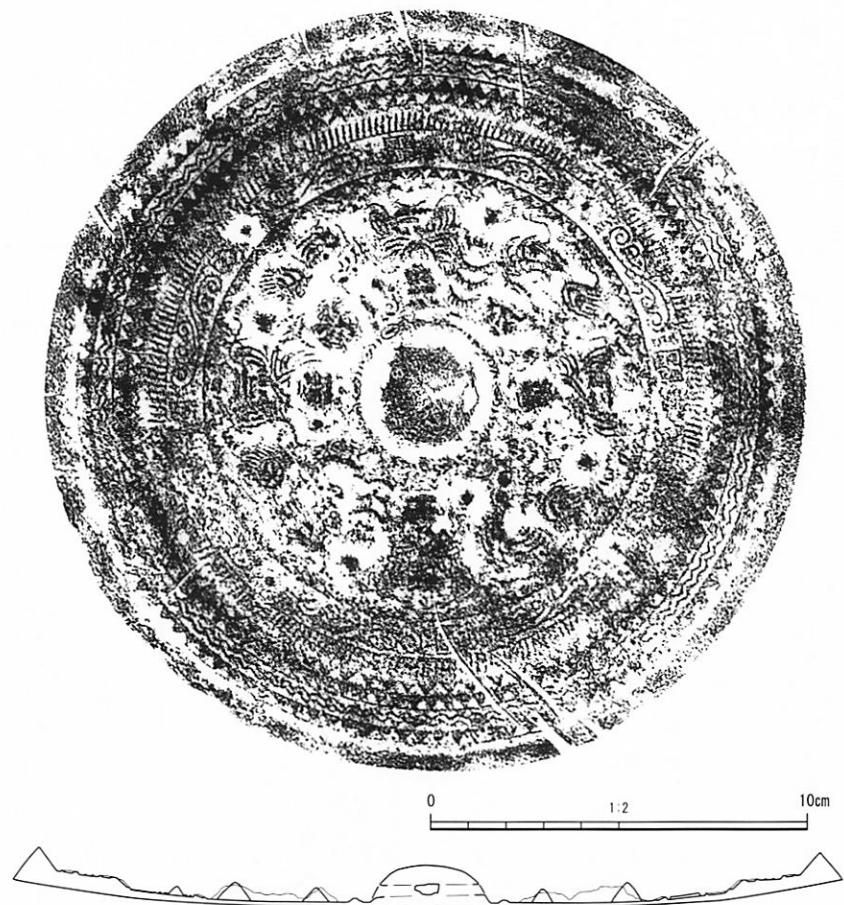


図2 木村定三コレクション 万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡拓影・断面図



図3 静岡県磐田市経塚古墳出土の「同范鏡」

脚ともに爪をもつ。体部の後方には長く伸びる尾が付属する。

いわゆる傘松形文様は、神像の左側、乳の内側に合計2ヶ所配される。蓮弁上の房で飾られた台座に軸を挿し、傘松形そのものは3段の房によって表わす。非常に写実的な表現をもつ。新納泉による分類では、傘松形1式に該当するものである(新納1991)。

内区主文部の外周には幅3mm、高さ1mmほどの界圏がめぐる。界圏の内斜面には外向きの鋸歯文をほどこす。

界圏外周には2条の文様帯からなる副文部がある。内側が幅1cmほどの唐草文帯であり、外側が幅約7mmの櫛歯文帯である。唐草文帯は、「日月日日」銘を配する一辺が8mm程度、高さ1mmほどの方格を4個と、円圈座とともに直径約3mm、高さ2mmの円座乳4個を交互に置いて全体を8区画する。各区画にはほぼ同一の表現の唐草文帯を配する。唐草文帯は簡素な構成をとりつつも、浮き彫り状の部分のある力強い表現である。

**外 区** 外区には内区より3mmほどの段差を経て至る。段差となる斜面には外向きの鋸歯文をめぐらす。文様帯部分のもっとも厚い部分は5mm程度に達し、非常に重厚なつくりである。とくに、文様帯部分はほぼ一定に厚い点が注目できる。縁の突出は小さめであり、外区2式に位置づけられる(岩本2008)。

文様帯は3条からなる。内側から鋸歯文帯—複線波文帯—鋸歯文帯である。内側の鋸歯文帯は幅約4mmであり、正三角形に近い外向きの鋸歯文を配する。中央の複線波文帯は幅6mm程度であり、2条の波文帯からなる。外側の鋸歯文帯は幅約4mm、内側と同様に外向きの鋸歯文を配する。外側の鋸歯文帯の外周には一条の突線がめぐる。

縁部は断面が正三角形に近い形態をなす。

**製作技法** 文様の表出は比較的鮮鋭であり、鑄上がりは良い。明らかな鋳造欠陥をみいだすことはできない。ただし、図で右側に位置する鉢孔がやや角張った形状を呈するのにたいし、左側に位置する鉢孔はわずかに丸みを帯びる(図4右)。断面図においても、左側に位置する鉢孔の開口部にはやや丸みがあるのを確認できる。丸みは部分的に生じており、研磨などの二次的な加工ではなく、湯周り不良によるものと考える。

鏡面と縁部外斜面では、仕上げにかかる研磨痕跡を観察できる。ただし、鉢を含めて内区では、布や鎧のために研磨の状況をくわしく確認できない。

**位置づけ** いわゆる舶載鏡に属する三角縁神獸鏡である。先行研究による位置づけをみると、福永伸哉の4段階編年では最古段階のA段階(福永1994)、岸本直文の5段階編年でも第1段階に位置づけられており(岸本1995)、三角縁神獸鏡のなかでも最古段階と評価されている。ただし、筆者の鏡群分類ではD群に属し、4段階中の第2段階に位置づけうる資料である(岩本2008)。三角縁神獸鏡に多数みとめられる典型的な四神四獸鏡配置を採用しており、形態

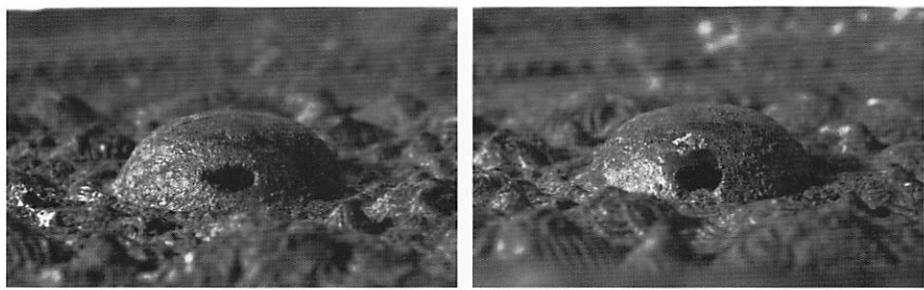


図4 木村定三コレクション 三角縁神獸鏡の鈕孔

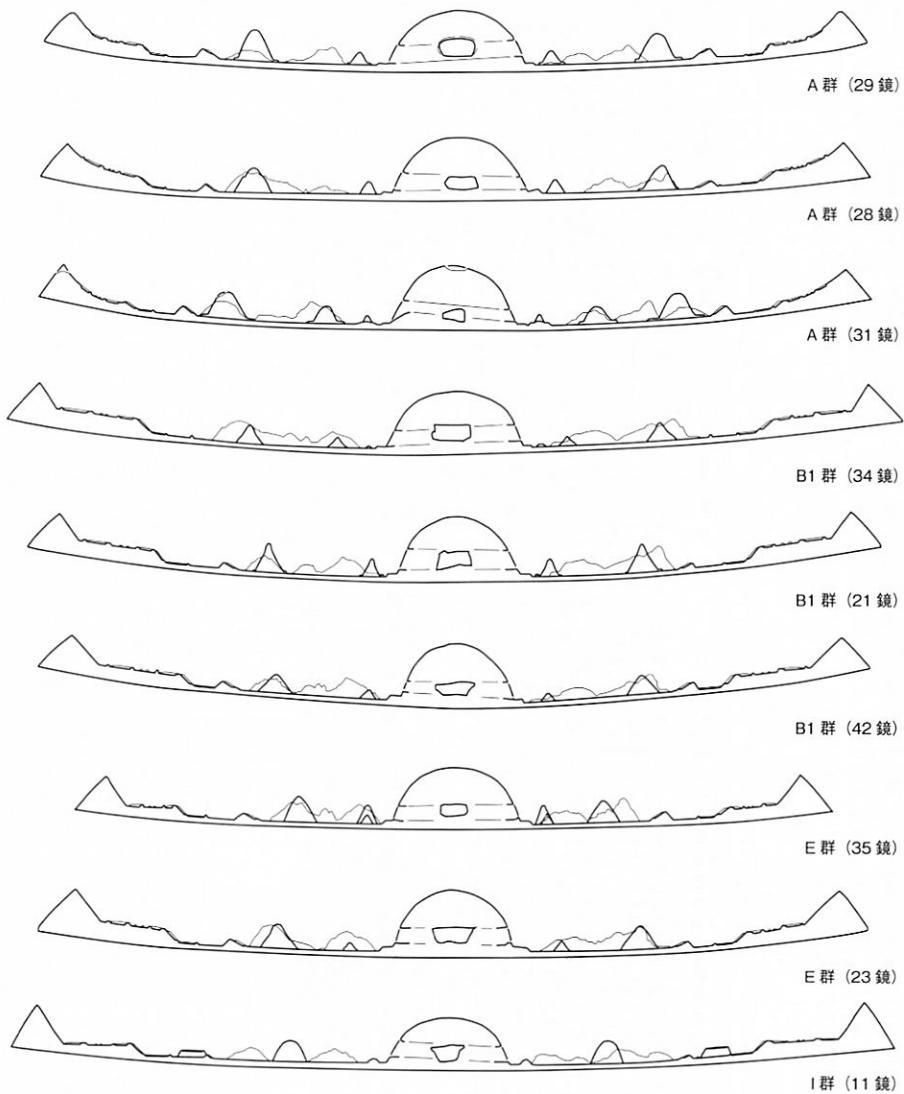


図5 木村定三コレクション鏡と同系統の三角縁神獸鏡断面図

29鏡. 佐味田宝塚古墳 28鏡. 椿井大塚山古墳M22 31鏡. 湯迫車塚古墳  
34鏡. 椿井大塚山古墳M4 21鏡. 椿井大塚山古墳M21 42鏡. 円照寺裏山古墳  
35鏡. 中小田1号墳 23鏡. コヤダニ古墳 11鏡. 宮ノ洲古墳

的にも明瞭な三角縁を有することから、すでに定型化したものと考えうるという点が、年代的に最古段階よりやや新しく位置づけている理由である。

## 2. 木村定三コレクション 三角縁神獸鏡の類例と位置づけ

すでに述べたとおり、本鏡はこれまで三角縁神獸鏡のなかでもっとも古相を示す一群と位置づけられてきた経緯をもつ(福永1994、岸本1995)。その具体的な根拠は、神獸像表現(福永1994)、ならびに傘松形文様(新納1991、岸本1995)が、きわめて写実的なものであるという点につきる。しかしながら、上記した特徴はいずれも文様表現にみるものであり、三角縁神獸鏡におけるそうした表現の差は、製作者集団の差といった系統的な違いに結びつく可能性が高い(岸本1989)。すなわち、文様表現は必ずしも年代差を反映する属性であるとは限らず、別の要素からの検討が不可欠なのである。

そこで以下では、木村定三コレクションの万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡に関連する資料をとりあげ、系統的・年代的な位置づけについてあらためて確認することとしたい。

**系統的位置** 三角縁神獸鏡を製作者ないしは製作者集団の違いを反映した複数の系統に整理しうることについては、大勢においてもはや異論がないと考える(岸本1989、岩本2008)。系統的に整理した場合、万年寺山鏡は表現①に属するわけであるが、表現①に属する例はこれまでに15種が確認されている。

これら15種について、福永伸哉は細分せずに年代的なまとまりとしては一つのものと理解する(福永1994)。いっぽう、岸本直文は写実的な傘松形文様の有無によって新古に区分し、写実的な傘松形文様あるいはモデルとなった画文帶神獸鏡の構図をとどめる11種を古く、それ以外の4種を新しく位置づける(岸本1995)。さらに筆者は、これら表現①に属する事例を形態的な特徴を基軸に、文様構成などから5鏡群に整理している(岩本2008)。A群は形態的に縁の断面が三角形状になっておらず、かつ三角縁神獸鏡のモデルとなった画文帶神獸鏡の構図をとどめるもの、B1群は縁の断面が小さめの三角形で、鉦が整った半球状のもの、D群は縁の断面が小さめの三角形で、鉦が低い半球状のもの、E群は縁の断面が大きめの三角形で、鉦が整った半球状のもの、I群は縁の断面が小さめの三角形で外区が薄く、鉦が低い半球状のものである(図5)。B1群以下はI群を除いて、内区の構図が三角縁神獸鏡に典型的な四神四獸鏡配置を採用する鏡群である(図6)。

**年代的位置** 上述の文脈において、編年的な位置づけに関連して重要であるのが、表現①に属する事例のなかに三角縁神獸鏡のモデル候補である画文帶神獸鏡の構図をとどめる事例が存在するという点である。この事実は、表現①に属する事例が三角縁神獸鏡のなかでも出現期から一定期間にわたって存在した

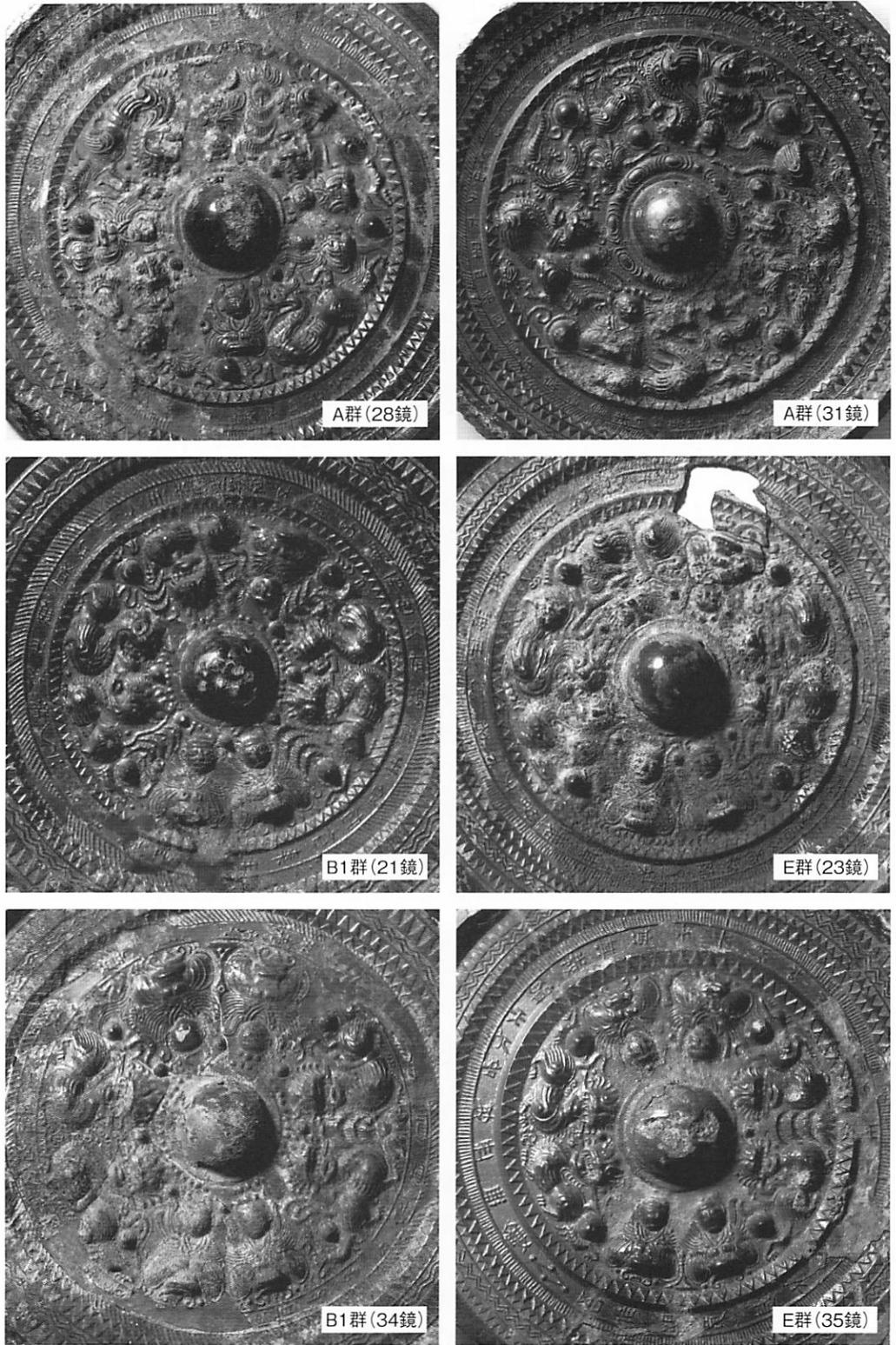


図6 木村定三コレクション鏡と同系統の三角縁神獸鏡

系統であることを暗示する。いわゆる舶載三角縁神獸鏡は全体として4ないし5段階に変遷するという見方が現状においては主流であり、表現①に属する資料をそのなかでも古相に位置づけるべきという先行研究にみる共通理解はきわめて妥当なものだといえよう。したがって、万年寺山鏡は三角縁神獸鏡のなかでは古いグループに属することは了解事項としてよく、議論されるべきは、表現①に属する事例が单一時期のまとまりとみなしうるかどうかという点であると考える。

**系統における細分単位としての鏡群と時期** 三角縁神獸鏡のある系統の時間幅そのものについては、同一系統において複数の実年代資料が確認されていない以上、不明といわざるを得ない。いっぽうで、相対年代を策定する作業では、同一系統となるまとまりをさらに細分して、細分した鏡群どうしの先後関係と併行関係を分析することが可能である。あらためて表現①という系統に属する三角縁神獸鏡の5鏡群をみると、鏡群ごとに差異が著しいことを理解できる(図5)。検討の便宜上、一定量の事例をもつ鏡群に限ると、A群・B1群・E群のなかでは、A群は文様表現に多様性がみとめられるのにたいし、B1群とE群では比較的等質的な状況をうかがうことができる(図6)。具体的には、A群の内区にみる主文様の構図はモデルとなった鏡の種類の違いを多様に反映しているが、B1群とE群は比較的共通した主文様の構図を異なる鏡においても共有する。すなわち、B1群とE群に属する個々の資料には、特段の個性をみいだしがたいのである。

三角縁神獸鏡は全体としてより類型的になるという変化を示すことが、これまでの研究においても明らかにされているところであり(福永1994、岸本1995)、その点をふまえるならば、多様性のあるA群がより古相に、等質性がうかがえるB1群とE群はより新相に位置づけられることになる。万年寺山鏡が属するD群は、形態としてはB1群とE群により近似し、文様構成も乳によって分割された区画を遵守する点でB1群とE群に共通するところが多い。こうしたことから、D群はB1群とE群と併行関係にあり、表現①のなかではより新相に位置づけるべき資料であると考える。

**関連資料を含めた系譜関係** 以上においては、同じ系統における資料群のなかでの位置づけを検討してきたわけであるが、万年寺山鏡が同一系統のなかではやや異質な特徴をもつ資料であることに注意が必要である。その特徴とは、内区外周部にほどこされた唐草文帯と、内区の主文様配置である。以下、この2点について類例をあげつつ、簡単な位置づけをしておきたい。

表現①に属する事例のほとんどは、内区外周部に銘帯をめぐらせる。若干例が銘帯以外の文様をめぐらせるが、万年寺山鏡はそうした事例の一つであり、唐草文帯を配する。そこで、唐草文帯をもつほかの三角縁神獸鏡をみてみよう。唐草文帯をもつ三角縁神獸鏡のうち、万年寺山鏡との関連性が強いのは、

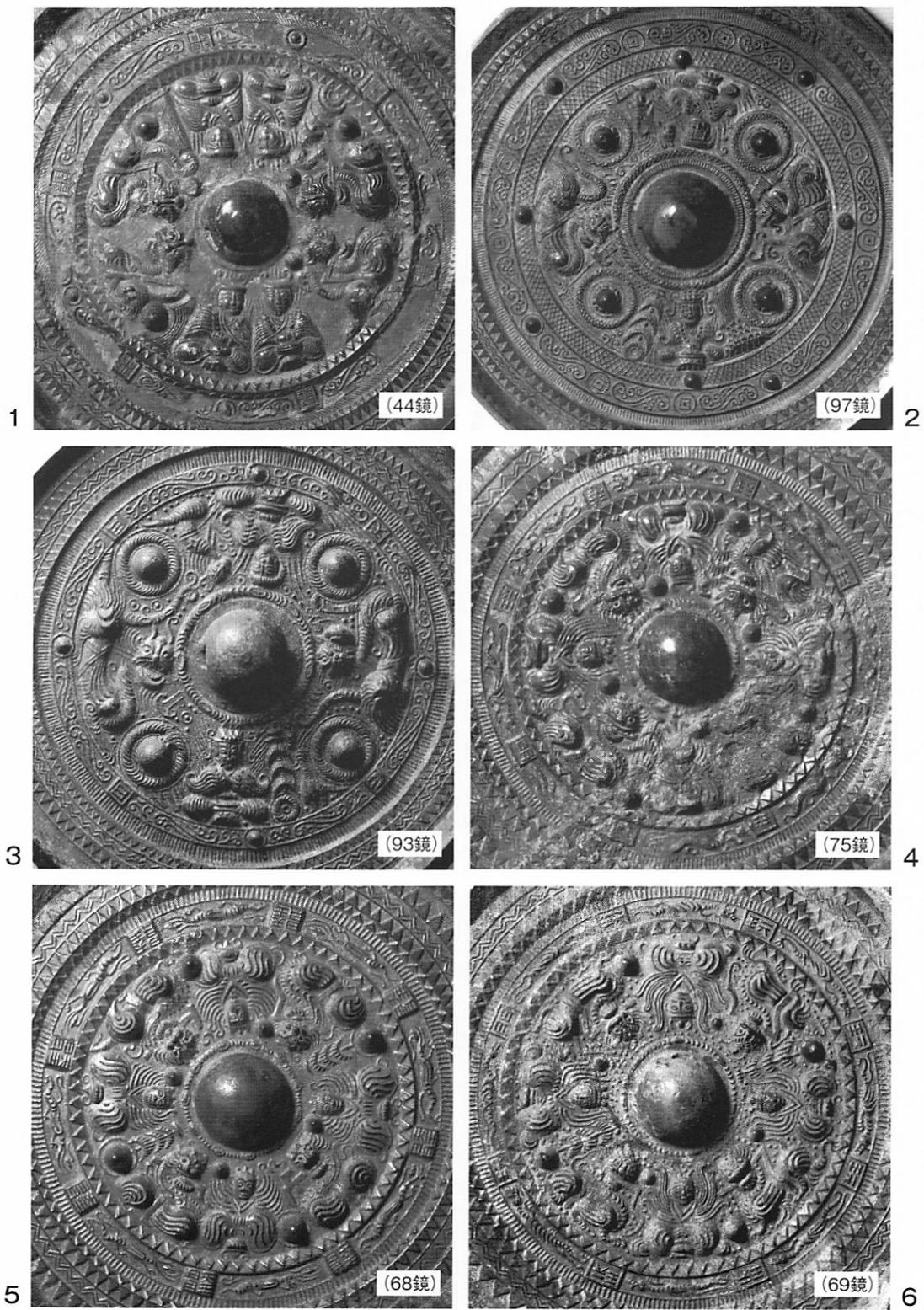


図7 木村定三コレクション鏡の関連鏡

方格と乳による区画に単位文として唐草文帯を配する例である。同様の例は、神獣像表現④を採用する事例にみとめられ(図7-1~3)、なかでも四神四獸鏡配置をなす三角縁神獣鏡目録の44鏡(以下、44鏡)は、唐草文の表現や方格、さらには乳の特徴が共通する。万年寺山鏡とのきわめて深い関連性をうかがうことができるであろう。

つづいて、類似する主文様配置をなす三角縁神獣鏡をみてみると。表現①を神獣像表現に採用する例のなかでも、四神四獸鏡配置をなす鏡は、乳で区画した各区画に神像どうし、あるいは獸像どうしという同じ種類の主像を配するのを基本とする。しかし、万年寺山鏡は乳による区画内に、神像と獸像という異なる主像を組み合わせており、この点が同じ系統のなかでは異質なのである。いっぽうで、万年寺山鏡と同様の主文様配置をとる事例は、一定数が存在しており、とくに内区外周部に獸文帯をめぐらし、かつ神獣像表現②を採用する例に多くみられる(図7-4~6)。なかには、75鏡のように獸像が顔面を側面観で表わす構図をもつ例までもが存在しており、万年寺山鏡との強い関連性をうかがわせる。

以上のように、木村定三コレクションの万年寺山古墳出土三角縁神獣鏡は、同じ系統と認定できるまとまりのなかでは、年代的には新相に位置づけられ、さまざまな点においてやや異質な特徴をもつ。しかし、こうした例外ともいえる異質な特徴は、むしろ別の系統の特徴と共通するものであり、万年寺山鏡を介して複数の系統すなわち製作者集団の交流の存在を読みとることが可能なのである。このように、三角縁神獣鏡の製作体制は、系統ごとに特徴のある構図やモチーフを用いながら鏡づくりに関与することを基本としながらも、まれに別の系統と接触をもつことで特徴的な鏡を生み出すこともあった。系統それぞれの独立性は原則としては強いものの、諸系統は没交渉ではなく、交流をもつことでより多様な鏡の製作をめざしたのだと理解できるであろう。

### 3. 万年寺山古墳出土鏡群の評価

前章までのところで、木村定三コレクションにある万年寺山古墳出土三角縁・日月日目・唐草文帯四神四獸鏡にかんして観察と位置づけの検討を通して、資料批判を試みた。以下では、伴出したほかの銅鏡について概観し、万年寺山古墳出土鏡群という、考古資料的なまとまりにたいして簡単な評価をおこなうこととした。

**万年寺山古墳出土鏡(図8)** 万年寺山古墳から出土した銅鏡について、大まかに年代的な位置づけの古いものから新しいものへと便宜的に番号を付して、以下に個別に説明する。

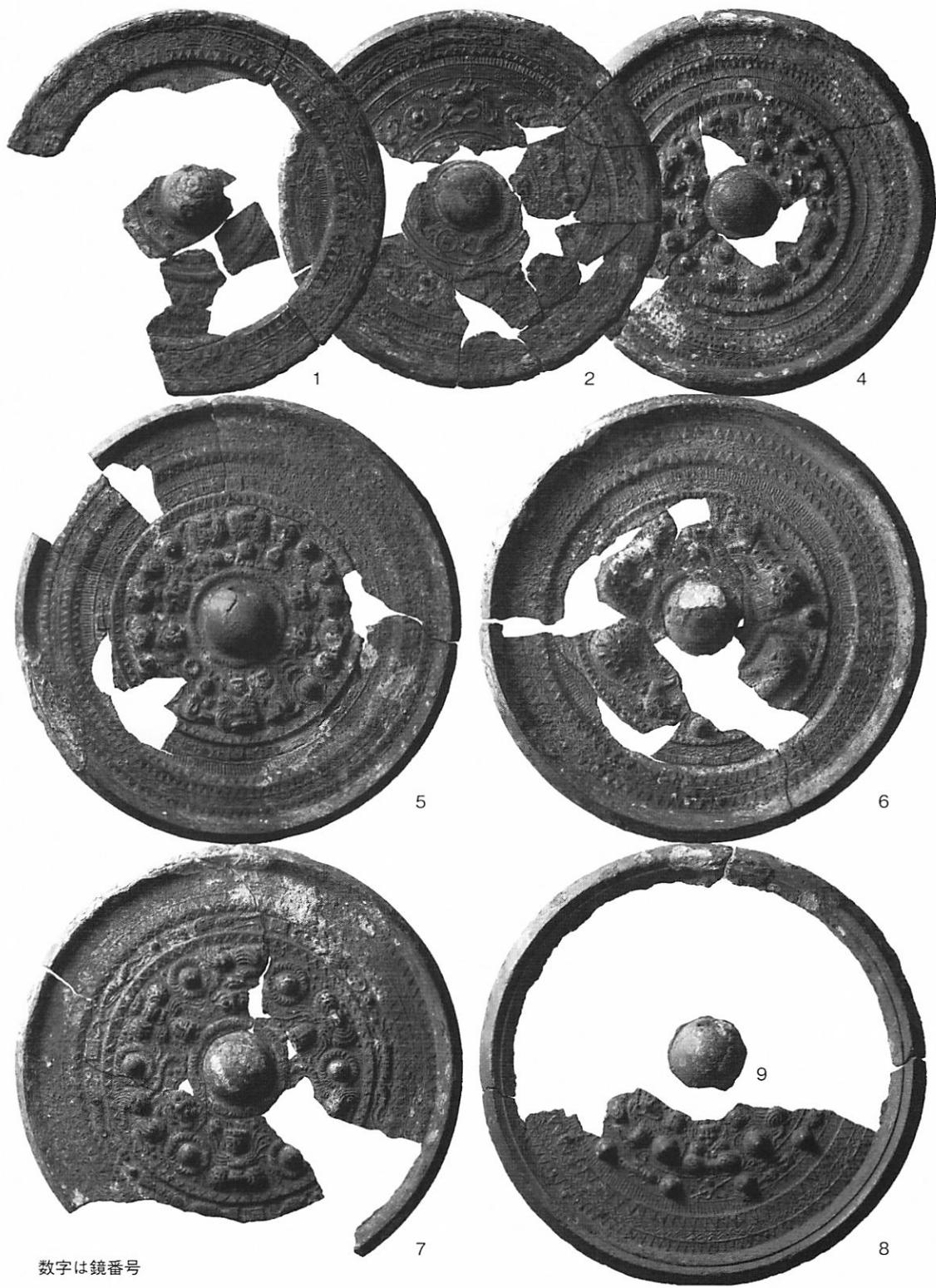
副葬鏡群のなかでもっとも古く位置づけうる浮彫式獸帶鏡を鏡1とする。直

径はおよそ17.9cmに復元できる。鉢孔は円形を呈する。外側の一段高い外区には獸文を細線で表現する。内区は欠損が著しく、ほとんど残存しない。一部に残る主像は、あまり立体感のない表現をもつ。ただし、くわしく観察すると、主像の輪郭に細線をともなう形式である点を確認することが可能であり、岡村秀典の分類の浮彫I式に属するものと判断できる。後続する浮彫II式にA.D.86年の紀年銘をもつ例があるので、I式の年代は1世紀第3四半期ごろと考えられる(岡村1993)。後漢代でも前期に製作された鏡であり、古墳の築造年代との間には少なくとも200年程度の隔たりがある。

もう1面の盤龍座浮彫式獸帶鏡を鏡2とする。直径は19.5cmに復元できる。青龍、白虎、朱雀、玄武などの四神を内区の主像とする点、あまり立体感のない主像をもつ点は、鏡1とした浮彫式獸帶鏡とまったく同じである。外区は平彫りの獸文をめぐらす。内区の外周に七言句の銘文があり、「尚方作竟(鏡)大母傷 □□刻成文章 白虎辟邪居中 毒金如石佳自(且)好 上有山(仙)人不知老兮」とある。なかでも注目できるのが、4句目にある「佳自好」であり、「且」という文字を書き損じて「自」とする。同様の書き損じは、滋賀県大岩山古墳や兵庫県吉島古墳・京都府一本松塚古墳から出土した盤龍座浮彫式獸帶鏡にも確認できる。とくに、兵庫県吉島古墳と京都府一本松塚古墳から出土した鏡が、「同範鏡」である点はきわめて重要である(小林1952)。鉢孔が長方形である点も含めて、三角縁神獸鏡と関連の深い鏡であり(福永1991)、三国時代の魏(220-265年)において製作されたものと考える。なお、文様表現は万年寺山鏡や大岩山鏡がより写実的であり、獸像の輪郭に細線をめぐらすなど浮彫式獸帶鏡の特徴が濃厚にとどめる。たいして、吉島・一本松塚鏡には輪郭線がなくなり、やや立体的な表現となるなど文様表現に浮彫式獸帶鏡から逸脱した特徴をみとみうる。近しい工房において万年寺山鏡・大岩山鏡を手本として、別の工人が吉島・一本松塚鏡を製作したものと評価しておきたい。

鏡3は前章までにおいて検討した三角縁・日月日日・唐草文帶四神四獸鏡である。以下、記述が重複するが、要点を再度述べる。直径は21.9cm。やや平たい鉢と小さな乳をもち、縁部が小さく、外区は一定に厚い。岩本分類D群に属する(岩本2008)。外区文様は鋸歯文-複線波文-鋸歯文、内区外周を小乳と「日月日日」銘方格によって区画して、簡素ながら力強い唐草文を配する。内区は神像にたいして獸像を向かい合わせるように左右に対置させる。神獸像の表現は写実的であり、岸本分類表現①に属する(岸本1989)。長方形鉢孔をもつ。「同範鏡」が静岡県経塚古墳で1面確認されている。福永編年A段階(福永1994)、岸本編年第I段階(岸本1995)と出現期の三角縁神獸鏡として位置づけられているが、わたしは神獸像配置などからすでに三角縁神獸鏡として定型化したものと考え、第2段階に位置づけている(岩本2008)。

鏡4は、三角縁吾作四神四獸鏡である。ほかに「同範鏡」が奈良県黒塚古墳



数字は鏡番号

図8 そのほかの万年寺山古墳出土鏡 [S=1:3]

や京都府椿井大塚山古墳などから6面出土している。直径は約20.1cmに復元できる。半球形の鉢、小さな乳、縁部が大きめで外区は一定に厚い。岩本分類E群に属する。外区文様は鋸歯文-複線波文-鋸歯文、内区外周に「吾作」ではじまる銘文をめぐらす。内区は神像と獸像を2体ずつ並列させる。神獸像の表現は写実的であり、岸本分類表現①である。長方形鉢孔をもつ。福永編年A段階、岸本編年第I段階に位置づけられる。岩本編年では第2段階となる。

鏡5は、三角縁陳是作六神四獸鏡である。「同范鏡」は福岡県妙法寺2号墳で1面確認されている。直径は約21.9cmに復元しうる。半球形の鉢、小さな乳、縁部が小さく外区は一定に厚い。岩本分類B2群に属する。外区文様は鋸歯文-複線波文-鋸歯文、内区外周に「陳是作」ではじまる銘文をめぐらす。内区は神像と獸像を複数並列させる。神獸像の表現は岸本分類表現⑥である。全体に立体感が強い表現である。長方形鉢孔をもつ。福永編年B段階、岸本編年第III段階に位置づけられる。岩本編年では第2段階となる。

鏡6は、三角縁波文帶盤龍鏡である。ほかに「同范鏡」が兵庫県吉島古墳などから3面出土している。直径は約22.1cmに復元できる。半球形の鉢、小さめの乳、縁部が大きめで外区は一定に薄い。岩本分類では盤龍鏡3類に属する。外区文様は鋸歯文-複線波文-鋸歯文、内区外周に複線波文帯をめぐらす。内区は鉢の下に胴部が隠れる龍虎像を置く。長方形鉢孔をもつ。福永編年B段階、岸本編年第IV段階に位置づけられる。岩本編年では第2段階となる。

鏡7は、三角縁・君・宜・官・獸文帶三神三獸鏡である。「同范鏡」に奈良県佐味田宝塚古墳で出土した1面がある。直径は約22.1cmに復元しうる。半球形の鉢、小さな乳、縁部がごく小さく外区は一定に薄い。岩本分類ではJ1群に属する。外区文様は鋸歯文-複線波文-鋸歯文、内区外周を小乳と「君」・「宜」・「官」銘の方格で区画し、四神に由来する獸像をめぐらす。内区は神像と獸像を1体ずつ置く。神獸像の表現は岸本分類表現⑤である。長方形鉢孔をもつ。福永編年C段階、岸本編年第IV段階に位置づけられる。岩本編年の第3段階である。

鏡8は、三角縁獸文帶三神三獸鏡になるものと判断できる。細部の文様や範傷が共通する点で「同范鏡」と判断できる香川県蓮尺茶臼山古墳出土鏡によって、文様と形態を把握できる。直径は約23.3cmに復元できる。大きな乳、縁部が非常に大きく外区は一定に薄い。岩本分類V群に属する。外区文様は鋸歯文-複線波文-鋸歯文、内区外周を乳で区画し、各種の獸像を置く。内区は神像と獸像を1体ずつ配する。神獸像の表現は岸本分類表現⑫である。長方形鉢孔をもつ。福永編年D段階、岸本編年第V段階に位置づけられる。岩本編年では第4段階となる。

鏡9として、これまで鏡8に接合するものととりあつかわれてきた鉢の破片を、別個体と認識する。その理由は、そもそも鏡8との接合関係がないこと、

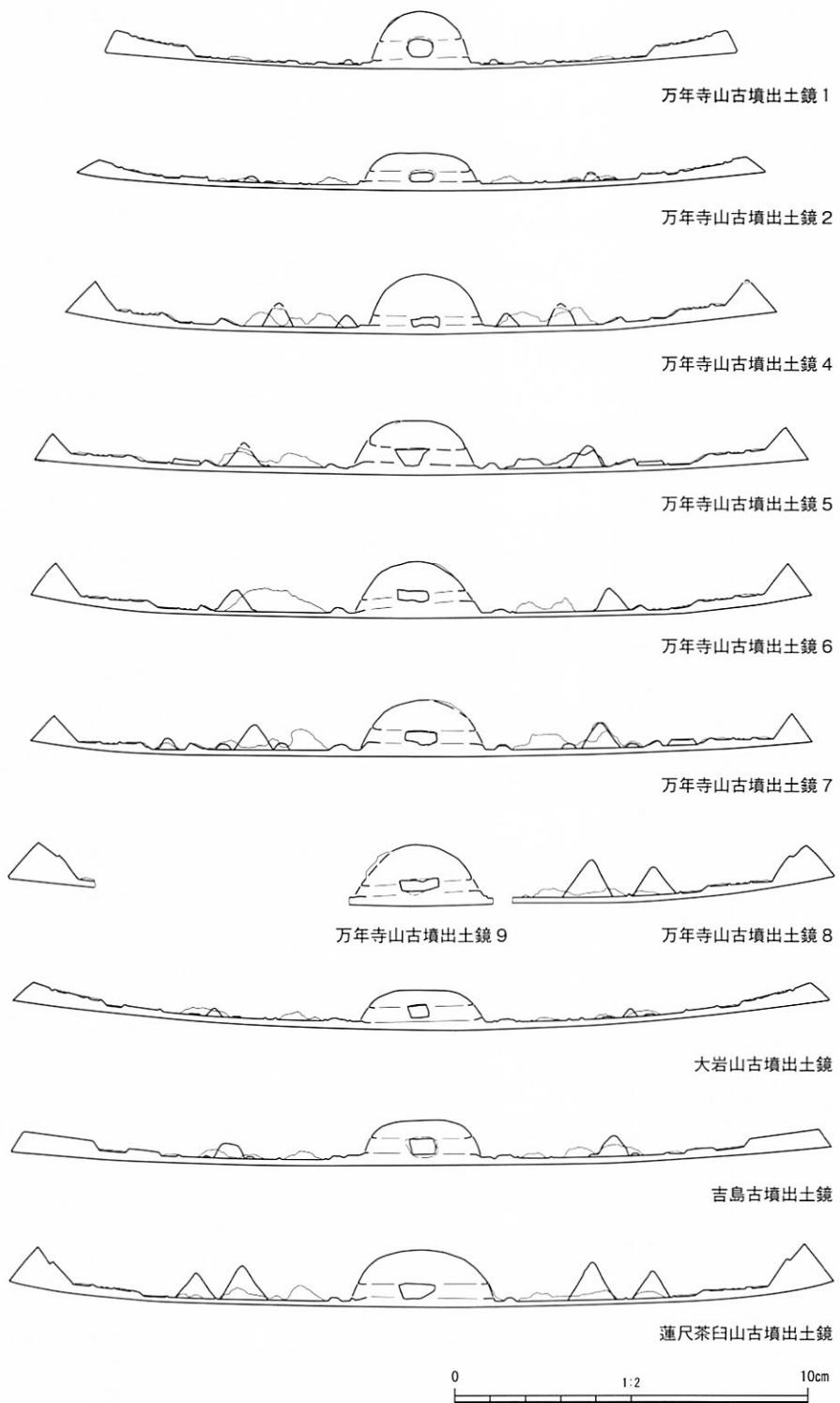


図9 万年寺山古墳出土鏡と関連鏡

鏡8の「同範鏡」である蓮尺茶臼山鏡の鉢と形態的特徴や大きさが異なる点にある。一部の文様を改変するような例外を除いて、「同範鏡」どうしにおいては各部の文様・形態が共通する。そうした点をふまえると、①蓮尺茶臼山鏡の鉢は上面が扁平な形態をなし、直径が大きく、高さが低い、②万年寺山鏡は上面が丸く、直径がやや小さめであり、高さがわずかに高い、③蓮尺茶臼山鏡では鉢のまわりに有節重弧文座をめぐらせるが、万年山鏡は鉢座に円座を採用するという違いがあることに気づく。また、鏡8の内区主文部は、神像の頭部まで残存しており、内側の欠損部は鉢座と鉢のほぼ該当するものと思われる。欠損部分の大きさにたいして、この鉢の破片がかなり小さいことも、別個体と考える理由のひとつである。ただし、小さいとはいっても、鉢の直径が3.6cmと大型であり、長方形鉢孔をもつことから、三角縁神獸鏡の鉢である可能性は高い。

**副葬鏡群の位置づけ** 万年寺山古墳出土鏡群の特徴は、多数の三角縁神獸鏡が副葬され、それらがすべていわゆる舶載鏡に属するものであり、古相のものから新相のものまで長期におよぶ組合せを示す点と考える。いわゆる「伝世鏡」(小林1955)と評価しうる後漢鏡を含み、「仿製」三角縁神獸鏡あるいは仿製鏡を含まない鏡群である。三角縁神獸鏡の組合せとしては、筆者の編年では第2段階から第3段階までの資料が連続的に存在し、舶載鏡でも最新段階に属する例がみとめられる。したがって、万年寺山古墳の築造時期としては、古墳時代前期中葉以降の位置づけを与えることが可能である(岩本2010)。この想定は、埋葬施設が粘土槨であったという情報とも矛盾しない。

#### 4. おわりに

木村定三コレクションの万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡について紹介するとともに、系統的・年代的な位置づけを確認した。その過程において、いわゆる舶載鏡として分離可能な一群の三角縁神獸鏡のなかでは最古段階には位置づけられない、すでに定型化した段階の三角縁神獸鏡と理解すべきことを説いた。

いっぽうで、万年寺山鏡は同じ系統に属する事例のなかではやや異質な特徴をもつこと、こうした特徴が別の系統とのかかわりを示すものと理解できることから、三角縁神獸鏡生産が系統を基軸におこなわれるものでありながら、諸系統はけっして没交渉ではなかったことを示すものと考えた。このように、木村定三コレクションの万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡は、定型化して間もない時期における三角縁神獸鏡生産の多様な系統関係の具体像を物語る格好の資料と評価できるのである。

さらに、万年寺山古墳から出土したそのほかの銅鏡についても、その概略を述べ、副葬鏡群としての位置づけを整理した。今後、万年寺山古墳出土鏡群が基準資料として積極的に活用されることを期待したい。

## 付 記

本稿の執筆にあたり、資料の所在について情報の提供をいただいた名古屋市博物館 梶山勝氏に感謝申し上げます。また、資料の実見ならびに掲載に際しては、愛知県美術館 鮎井秀伸氏にご高配をいただきました。関連資料の閲覧では、京都大学総合博物館ならびに東京国立博物館、東京大学総合研究博物館、連城寺の諸機関からご高配を賜りました。末筆ながら、あわせてお礼申し上げます。

---

## 引用文献

- 岩本 崇 2008 「三角縁神獸鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』第92巻第3号 日本考古学会 pp.1-51
- 岩本 崇 2010 「三角縁神獸鏡と古墳の出現・展開」『日本考古学協会2010年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会2010年度兵庫大会実行委員会 pp.115-130
- 梅原末治 1916 「河内枚方町字萬年山の遺蹟と発見の遺物に就きて」『考古学雑誌』第7巻第2号 日本考古学会 pp.50-53
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集 国立歴史民俗博物館 pp.39-83
- 岸本直文 1989 「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』第72巻第5号 史学研究会 pp.1-43
- 岸本直文 1995 「三角縁神獸鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会40周年記念論文集 考古学研究会 pp.109-116
- 京都大学考古学研究室 2000 「三角縁神獸鏡目録」『大古墳展—ヤマト王権と古墳の鏡—』東京新聞社 pp.248-254
- 車崎正彦編 2002 「考古資料大観」5 弥生・古墳時代鏡 小学館
- 後藤守一 1926 「漢式鏡」日本考古学大系 雄山閣 pp.495-499
- 小林行雄 1952 「同範鏡による古墳の年代の研究」『考古学雑誌』第38巻第3号 日本考古学会 pp.1-30
- 小林行雄 1955 「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻第1号 史学研究会 pp.1-20
- 小林行雄 1971 「三角縁神獸鏡の研究—型式分類編—」『京都大学文学部紀要』第13(1976)『古墳文化論考』平凡社 pp.303-377 (に加筆のうえ再録)
- 新納 泉 1991 「権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』同刊行会 pp.176-185
- 枚方市史編纂委員会 1967 「枚方市史」第一巻 枚方市役所
- 福永伸哉 1991 「三角縁神獸鏡の系譜と性格」『考古学研究』第38巻第1号 考古学研究会 pp.35-58
- 福永伸哉 1994 「三角縁神獸鏡の歴史的意義」『倭人と鏡 その2—3・4世紀の鏡と墳墓—』第36回埋蔵文化財研究会 pp.349-358

## 挿図出典

- 図1 木村定三コレクション万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡(愛知県美術館蔵)
- 図2 木村定三コレクション万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡(拓本:車崎編2002・p.187掲載  
187-3図を転載)、断面図(愛知県美術館蔵)
- 図3 経塚古墳出土三角縁神獸鏡(連城寺蔵)
- 図4 木村定三コレクション万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡(愛知県美術館蔵)
- 図5 29鏡:佐味田宝塚古墳(東京国立博物館蔵)、28鏡:椿井大塚山古墳M22(京都大学

総合博物館蔵)、31鏡：湯迫車塚古墳(東京国立博物館蔵)、34鏡：椿井大塚山古墳M4(京都大学総合博物館蔵)、21鏡：椿井大塚山古墳M21(京都大学総合博物館蔵)、42鏡：円照寺裏山古墳(岩本2008を改変トレース)、35鏡：中小田1号墳(岩本2008を改変トレース)、23鏡：コヤダニ古墳(岩本2008を改変トレース)、11鏡：宮ノ洲古墳(東京国立博物館蔵)

図6 28鏡：椿井大塚山古墳M22(京都大学総合博物館蔵)、31鏡：湯迫車塚古墳(東京国立博物館蔵)、21鏡：椿井大塚山古墳M21(京都大学総合博物館蔵)、23鏡：コヤダニ古墳(岩本2008を転載)、34鏡：椿井大塚山古墳M4(京都大学総合博物館蔵)、35鏡：椿井大塚山古墳M7(京都大学総合博物館蔵)

図7 44鏡：椿井大塚山古墳M3(京都大学総合博物館蔵)、97鏡：推定茨木將軍山古墳(岩本2008を転載)、93鏡：東之宮古墳(岩本2008を転載)、75鏡：椿井大塚山古墳M16(京都大学総合博物館蔵)、68鏡：椿井大塚山古墳M34(京都大学総合博物館蔵)、69鏡：椿井大塚山古墳M36(京都大学総合博物館蔵)

図8 万年寺山古墳出土鏡群(東京大学総合研究博物館蔵)

図9 万年寺山古墳出土鏡群(東京大学総合研究博物館蔵)、大岩山古墳・吉島古墳・蓮尺茶臼山古墳出土鏡(東京国立博物館蔵)

所蔵機関名記載の資料は岩本撮影・実測による。



大阪府万年寺山古墳出土三角縁・日月日日・唐草文帯四神四獸鏡